★元タイ外相の回想にみるＡＳＥＡＮの源流＝松宮敏樹（ジャーナリスト）

１年ごとに変わるＡＳＥＡＮの議長国を今年はタイがつとめます。ＡＳＥＡＮは加盟１０か国の合意で運営されていますが、それぞれの年の議長国も独自の役割を果たします。一連の外相や首脳の会議を前に、タイがＡＳＥＡＮ発足で果たした役割を振り返ることは、ＡＳＥＡＮの源流を知ることにもつながります。

ＡＳＥＡＮは１９６７年８月８日に、タイの首都バンコクで設立されました。宣言が通称「バンコク宣言」といわれるゆえんです。この地でＡＳＥＡＮが設立されたのは後でふれるようにタイが重要な役割を果たしたからです。

発足時の加盟国はタイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポールの五か国。バンコク宣言は第二項で、ＡＳＥＡＮの目的を７項目に規定しています。注目されるのは第一と第二です。

第一は、「繁栄と平和の共同体」として「東南アジア諸国の基盤を強化する」と明記。「平等と協力の精神でともに努力」し、「地域の経済成長、社会進歩、文化の発展を加速する」と宣言しました。軍事同盟ではなく、「繁栄と平和の共同体」という目標を最初から掲げたのです。

第二は「国連憲章の諸原則」「国際法の支配と正義の尊重」を通じて、「地域の平和と安定を促進する」という宣言です。軍事力ではなく、国際法の尊重が強調されています。

さらに注目されるのが組織の基本的性格です。第四項は、「前記の諸目的及び原則に同意するすべての東南アジア諸国に門戸を開放する」と宣言しました。発足時に地域のすべての国に参加を呼びかけたのです。いま、ＡＳＥＡＮはまさに地域全体、１０か国が参加する組織に発展しています。こうしてＡＳＥＡＮは、「敵」を想定して地域に分裂を生む軍事同盟とはことなる道を歩み始めました。

これは当時の東南アジアの状況を考えればとても興味深いことです。１９６７年といえば、この地は今とは逆に戦乱のまっただ中にありました。インドシナ半島では、ベトナムがフランスの植民地支配を打ち破ってジュネーブ協定（１９５４年）で北ベトナムの独立を実現しましたが、米国が軍事介入、侵略戦争を拡大。６５年からは北ベトナムへの爆撃も始めました。

北ベトナムなどに対抗する軍事同盟、東南アジア条約機構（ＳＥＡＴＯ）が１９５４年に設立され、米国、フランス、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、タイ、フィリピンが参加。その本部はタイにおかれていました。しかし、マレーシアやインドネシアなどはＳＥＡＴＯに参加せず、また、マレーシア、インドネシア、フィリピンなどは相互の領土紛争も抱えていました。米国主導のＳＥＡＴＯはその後、加盟諸国間の矛盾が深まり、ついに１９７７年に解散しました。

一連の経過のなかで東南アジアは外部からの軍事介入による分断・分裂と戦争に苦しみました。ＳＥＡＴＯ加盟国でもあったタイが、軍事同盟ではないＡＳＥＡＮ設立に動いたのはそんな状況への省察があります。

タイで中心的役割を果たしたのが当時の外相、タナット・コーマン氏（２０１６年に死去）でした。ＡＳＥＡＮのホームページにはコーマン氏の興味深い回想が掲載されています。このなかでコーマン氏はＡＳＥＡＮ結成の歴史的意義について、こう語っています。

「植民地の時代に宗主国によって互いに交流もなく隔絶を強いられてきたこの地域の分離や疎遠さに終止符を打つすばらしい成果だった」「第二次世界大戦後に始まった脱植民地化の動きの高まりを示すものだ」

当時、世界は米ソ両陣営に分かれ、新たに植民地から独立した諸国は非同盟の立場をとりました。そのなかで東南アジア諸国の連携をめざした理由を、コーマン氏は三つあげています。

―植民地の宗主国が地域から引き揚げ、新たな外部からの政治介入を招く力の空白が生まれる可能性がある

―ＳＥＡＴＯに失望した経験からみても、遠く離れた諸国間の協力は役立たず、むしろ危険だ。近接し、共通の利益を分かち合う諸国間の協力を打ち立てねばならない

―東南アジア諸国が力を合わせることが競い合う大国に対抗して、我々を守り、我々の立場を強める

コーマン氏は地域協力機構設立への模索を続け、マレーシア、インドネシア、フ

ィリピン、シンガポールの外相らと、バンコクから離れたリゾート地で数日間話し合い、バンコク宣言を練り上げました。回想のなかでコーマン氏はＡＳＥＡＮがよるべき原則をこう強調しています。

「世界の経験の教訓からも、弱い国は、より強い国の支援に頼るよりも、近隣諸国間の相互支援に頼るほうがいい。強国は弱小国の利益よりも自国の国益のために動くものだ」

「もう一つ守るべき原則は、我々の協力は非軍事的なものであるべきだということだ。軍事同盟をつくらせようという動きがあったが、我々は抵抗した。賢明に、そして正しく、我々は軍事的絡み合いを除外して経済面で協力するという決意を貫いた」

こうした原則を確立したＡＳＥＡＮが、その後の国際的な紛争でも「外交的、政治的な手段のみ」で対応し、国際的な信用と評価を高めてきた―。コーマン氏はそう強調します。

コーマン氏の回想はＡＳＥＡＮの源流に、殖民地からの独立と主権回復、大国に依存せず、支配されない非軍事の地域諸国間協力―「繁栄と平和の共同体」への志向があったことを示しています。（了）